墨州院
第38回東京展

墨州院第 38 回東京展

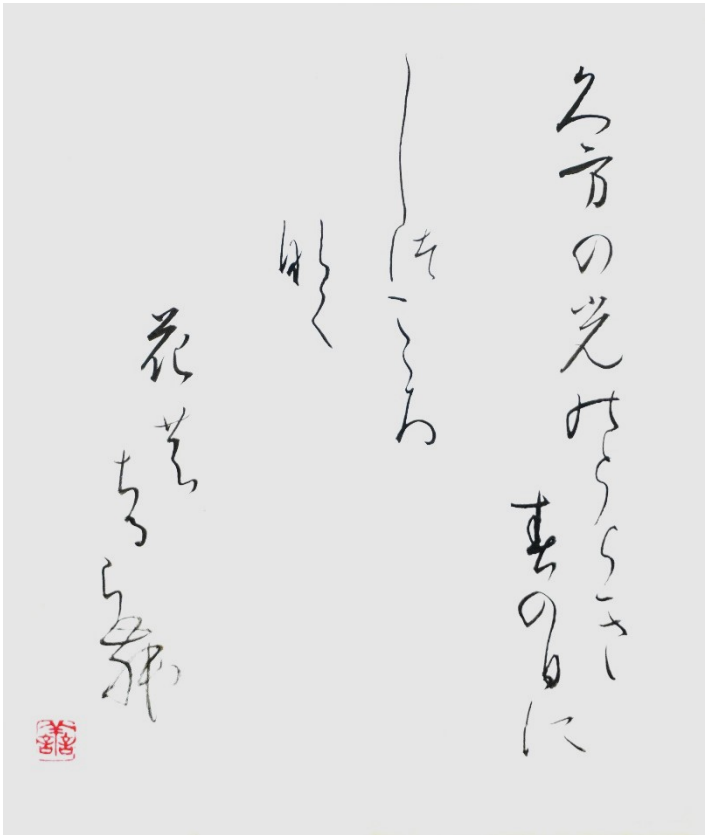
会　期　2025 年 2 月 3 日（月）～9 日（日）
会　場　東京・銀座「ギャラリー向日葵」
主　催　書道研究墨州院（主宰・会長 菊池春苔）
後　援　毎日新聞社・毎日書道会・一瀾書道会

（作品集）

発行日　2025 年 2 月 3 日（月）
発行者　菊池春苔
編集者　菊池苔鳳

事務局　書道研究墨州院
岩手県大船渡市大船渡町新田 44-15／電話 0192-27-3406

ホームページ



遺墨
菊 池 海 雲（書道研究墨州院創始者）

ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ（紀友則）

小色紙（21.2cm×18.2cm）
1980 年揮毫

賛助
福 島 一 浩（東京都葛飾区）

～靈妙～
春の月さはらば雫垂りぬべし（小林一茶）

色紙（27.2cm×24.2cm）

贊助
金 崎 峰 萃（愛媛県四国中央市）

雨滴聲（『禅語』より）

八切（68cm×17.3cm）

友交
松 尾 碩 甫（東京都北区）

長樂

原寸（4cm×2.5cm）

開催に当たって

書道研究墨州院東京・銀座展は、関東地区在住の会員有志が母体となり運営に当たっております。本部の所在が岩手県大船渡市という遠方であり、その地で開催されるメイン展に訪れるのが困難であるということから、当時、大学卒業したてのメンバーにより創められたものであります。

私ども書道研究墨州院の拠点が、岩手県大船渡市という遠方の地方にありながら、東京銀座で書展を四十年近くも開催し続けるということは、人員的・時間的・経済的な負担や苦難といった、筆舌し難いストレスを抱えるものであります。また、あの東日本大津波震災を始め、昨今のコロナ禍や各地での災害に加え、低賃金物価高騰による経済的低迷・少子高齢化による書道人口減など、取り巻く環境は益々嶮しく厳しい状況にあります。しかしながら、皆様のご支援お励ましを賜り、ここに第三十八回展も開催できますこと、厚く御礼申し上げます。

令和乙巳立春大吉日

書道研究 墨州院

主宰・会長　菊池春苔

主宰
菊 池 春 苔（岩手県大船渡市）

斬

45cm×23cm

主宰
菊 池 春 苔（岩手県大船渡市）

無語立階下低頭弄素衣怪他花上蝶偏作一雙飛（許燕珍）

半折（135cm×35cm）

主宰
菊 池 春 苔（岩手県大船渡市）

たんがぐ（気仙語「持ち上げる」）

八切（68cm×17.3cm）

主宰代行
菊 池 苔 雲（岩手県大船渡市）

仁者壽（『論語』より）

八切（68cm×17.3cm）

主宰代行
菊 池 苔 雲（岩手県大船渡市）

靄

3尺×3尺（90.9cm×90.9cm）

代表
佐々木乾龍（東京都新宿区）

雪月花

半紙 1/2（12.2 ㎝×33.3 ㎝）

代表
佐々木乾龍（東京都新宿区）

游雲驚龍（『晋書』より）　原寸（7.5cm 角）

滿目蕭然（范仲淹）　原寸（7.5cm 角）

代表
佐々木乾龍（東京都新宿区）

心外無別法（『従容録より』）

尺八屏 1/4（117 ㎝×26.5 ㎝）

副代表
眞 壁 紅 蓮（東京都北区）

任運（『禅語』より）

半折 1/3（45.3cm×34.5cm）

副代表
眞 壁 紅 蓮（東京都北区）

～書と押し花のコラボレーション～
『花鳥風月』

半折 1/3（45.3cm×34.5cm）

副代表
眞 壁 紅 蓮（東京都北区）

『花吹雪』　傘（30cm×3 帳）

『花信風』　L 判・他

実行委員長
羽 山 李 岳（東京都足立区）

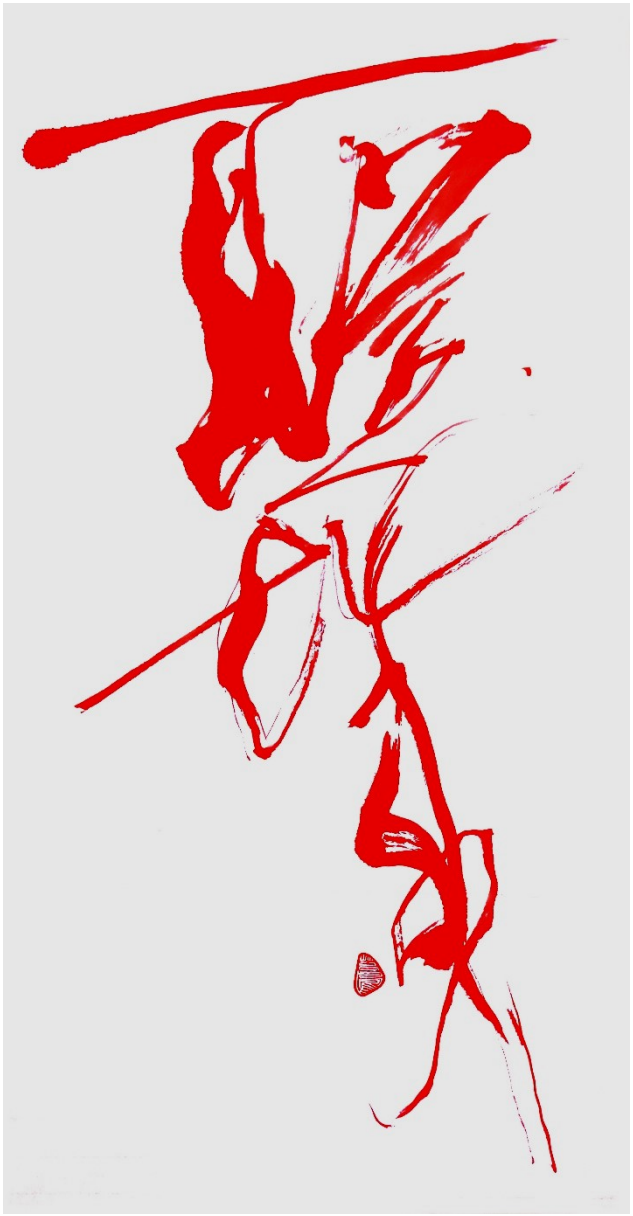
躬書是宿緣（乾隆帝）

全紙 1/3（136cm×23cm）

事務局長
菊 池 苔 鳳（岩手県大船渡市）

『花伝』

半紙（33.3cm×24.4cm）



事務局長
菊 池 苔 鳳（岩手県大船渡市）

『サンクチュアリ』

半折 1/2（68cm×34.5cm）

運営委員
佐 藤 苔 翠（神奈川県横浜市）

妍和

半折 1/2（68cm×34.5cm）

運営委員
兒 玉 春 苑（東京都府中市）

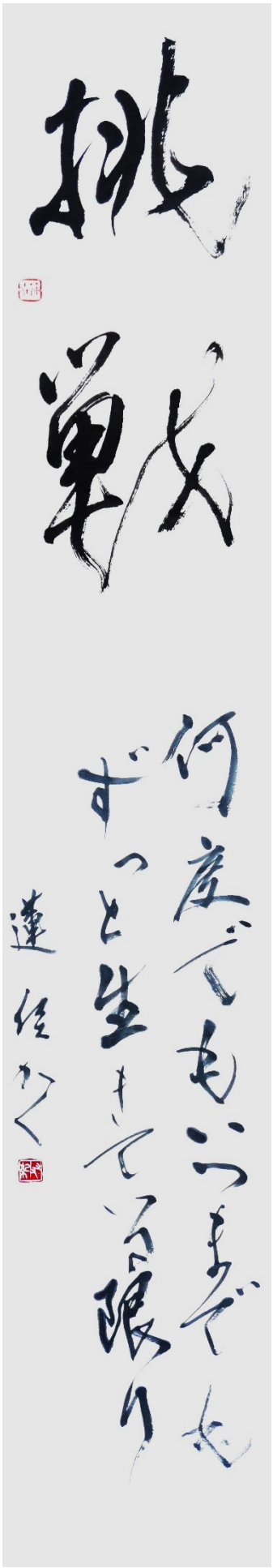
璘

半紙（33.3cm×24.4cm）

運営委員
兒 玉 春 苑（東京都府中市）

～三省～
一年の計を待たずや三が日（北川吉史）

全紙 1/3（136cm×23cm）



運営委員
松尾蓮佳（東京都北区）

～挑戦～
何度でもいつまでもずっと生きている限り

全紙 1/3（136cm×23cm）

運営委員
小松原朴象（東京都練馬区）

閒中酒靜裏泉（王錫）

尺八屏 1/4（117cm×26.5cm）

運営委員
中 島 州 麗（埼玉県さいたま市）

東風隨處起芳華（洪景盧）

全紙 1/3（136cm×23cm）

運営委員
長 澤 佳 玉（東京都大田区）

徳不孤必有鄰（『論語』より）

全紙 1/3（136cm×23cm）

甘竹荷州（宮城県仙台市）

熟麗

半紙（33.3cm×24.4cm）

大 西 憙 慎（愛媛県四国中央市）

蟠幹

半折 1/2（68cm×34.5cm）

菊 池 栖 雲（岩手県大船渡市）

窓下有清風（白居易）

（42cm×32cm）

菊 池 碧 雲（岩手県大船渡市）

介福（『易経』より）

半懐紙 1/2（24.5cm×18.2m）

金 野 州 紅（岩手県釜石市）

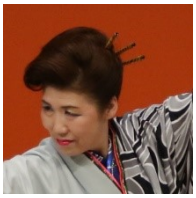
墨禪

半折 1/2（68cm×34.5cm）

佐 藤 翠 嶺（岩手県北上市）

柏葉壽（武平一）

半紙（33.3cm×24.4cm）



佐藤扇凰（岩手県陸前高田市）

月影清（杜甫）

全紙 1/6（68cm×23cm）

髙 橋 杏 雲（宮城県仙台市）

壽

半紙（33.3cm× 24.3cm）

竹 森 郁 子（埼玉県越谷市）

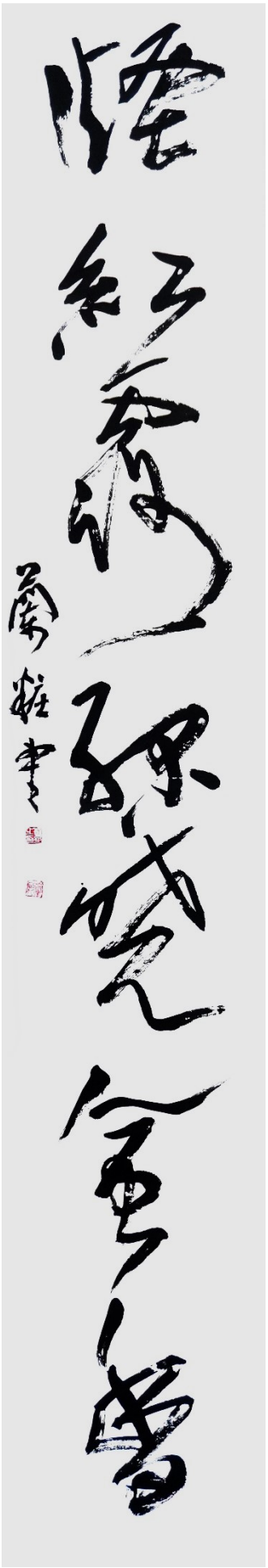
一塵不染（慧能）

八切（68cm×17.3cm）

濱田春怜（岩手県大船渡市）

花謝樹無影（『碧巌録』より）

全紙 1/3（136cm×23cm）



播摩蘭粧（岩手県宮古市）

煙紅露綠曉風香（蘇軾）

全紙 1/3（136cm×23cm）

武 川 象 濤（岩手県大船渡市）

守樸（抱朴子）

半折 1/2（68cm×34.5cm）

U２３
岡 安 花 穂（茨城県古河市）

高節卓不群（左思）

全紙 1/3（136cm×23cm）

U２３
菅 野 康 剛（岩手県陸前高田市）

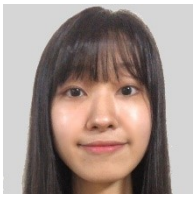
滅却心頭自涼（『禅語』より）

全紙 1/3（136cm×23cm）

U２３
金 野 友 菜（岩手県盛岡市）

芳草雨昏春夢寒（李中）

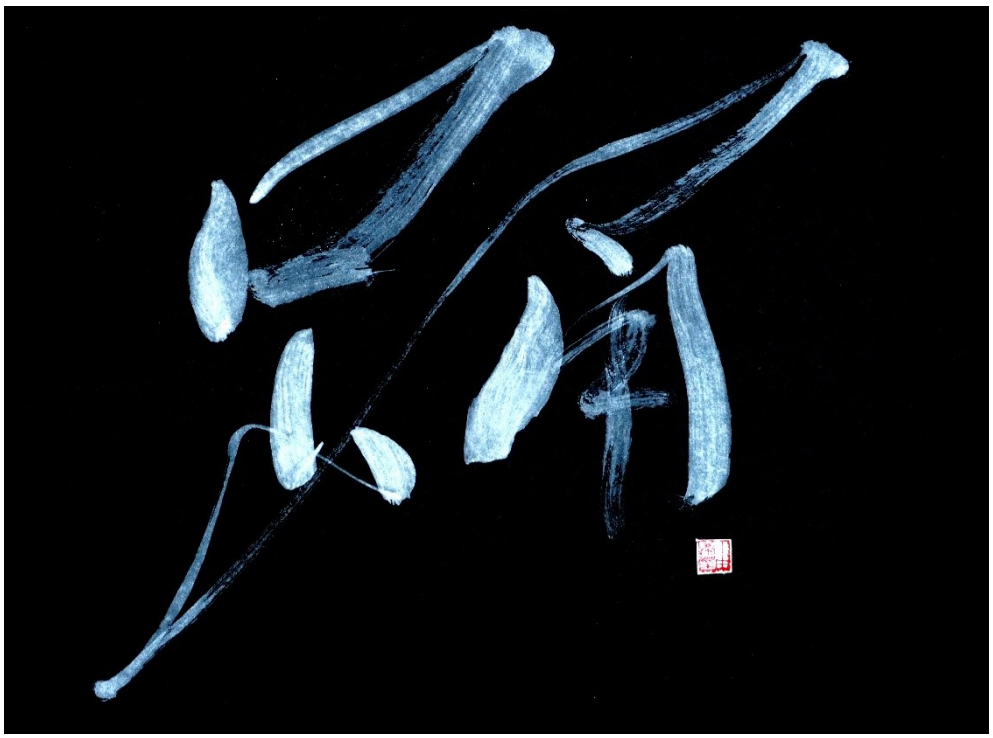
全紙 1/3（136cm×23cm）



U２３
中山ありさ（埼玉県草加市）

斜陽照芳草（金若蘭）

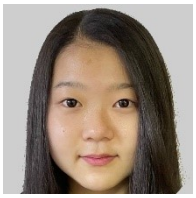
全紙 1/3（136cm×23cm）



Ｕ２３
松田由希菜（東京都北区）

踊

半紙（24.3cm×33.3cm）



U２３
吉 野 穂 香（東京都大田区）

吹笛秋山風月清（杜甫）

全紙 1/3（136cm×23cm）

美術品商：墨硯齋コレクション *VOL.8*

特別展示

雄勝石百様～原石・硯・スレート～

（日本一の硯郷：宮城県石巻市の雄勝硯Ⅱ）

この記述は、学術的・専門的な論評を本意としないことから、難解な表現による混同・錯覚・誤解が事実誤認に繋がらぬよう、できるだけ正確さを保持しつつも、便宜的な表記・表現・造語を用いる場合もある。硯の特徴は、あくまでも一般的に謂われる主な傾向であり、必ずしも絶対条件・必要条件ではない。坑洞名・年代・石紋等は、硯匠・研究家・専門家・現地バイヤーによる鑑定を始め、専門店などの入手先からの謂れも基にし、独自の判断を加えたものであり、高確度ではあるが、異論もありうるかも知れない。また、硯式・石紋の呼称は唐硯のものであるが、ここでも流用し、該当のないものは、漢文表現で意味が伝わるような造語を用いた。寸法は、縦型・横型に拘らず、㌢（縦㎝×横㎝×厚㎝または高㎝×重㎏）の順で表記する。雄勝硯材は、坑洞からの採石ではなく露天掘りではあるが、便宜上、その産出地を「○○坑」と表記する。作家として独立する職人を硯匠、硯房や会社・団体に所属する職人を硯工と使い分ける。硯名は、正確な漢文表現や中国語表現ではなく、所謂、和製漢語として意味が伝わるような命名とした。

雄勝硯は、経済産業大臣指定（国指定）伝統的工芸品・宮城県指定伝統工芸品で、和硯の代名詞とされ、最盛期にはシェア 90%を占有した宮城県・石巻市雄勝町の誇りである。他に指定されている硯は山口県の赤間石（関）硯とのみである。

起源は、1396 年の古文書に「雄勝の硯浜」の記述があることから、約 630 年前の室町時代と推測される。また、江戸時代に伊達藩が始めたと記される古文書もある。

硯材は、宮城県石巻市雄勝町で採石される北上山系登米層の古生界ペルム紀の 3～2 億年前の地層から産出される黒色硬質粘板岩である。これを黒くて美しいことから玄昌石と称し、雄勝産のものを雄勝石と呼ぶ。山梨県の雨畑硯の硯材は玄晶石と表記する。他の和硯材も殆どがこの系統で、中国江西省（旧安徽省歙県）の龍尾山（羅紋山）一帯で産出される歙州硯・羅紋硯の硯材である羅紋石と同種である。子供の頃、水切りで遊んだ、あの黒く薄い板状の石である。

埋蔵量は無尽蔵といわれ、露天掘りで採石される。地域全体が産出地であり、公式的発表によると、主には 8 カ所、東日本大津波震災以後は 4 カ所のみで採石される。

▼硯上山…北上山地末端の標高 520m。名の由来は、素晴らしい硯材が産出されるということで、当時の藩主・独眼竜正宗こと伊達政宗公に献上された山、献上山を文字って硯上山と表記されるようになった。二代藩主の伊達忠宗によって硯工がお抱えとなり、雄勝石の産出する山は、お留山として立入禁止とされた。現在、単にお留山と表記した場合、この硯上山を指す。

硯上山登山口と雄勝石スレート（硯上山坑）

▼明神山…「硯浜」のある地区。現在も採石されている唯一の坑。最大の採石場で、硯上山と同じ鉱脈。近年の雄勝硯は、ほとんどがここの硯材である。

明神山坑硯材岩盤と原石（硯材）

▼名振山…八景島や宮城県指定無形文化財「名振のおめつき」で有名な地区。1945 年以降、硯材の採石もされた。

▼波板…波板・分浜地区の採石地。硯材としては最高品質の波板石が産出される。波板石は通常の雄勝石より硬度が高く、歙州硯のような刷子紋・羅紋・金星・銀星が表出する硯材も多く産出される。かな書の大家で墨硯研究家として著名な植村和堂は、和硯の最高峰である高知県・土佐の蒼龍石硯（土佐硯）に匹敵すると賞している。

波板坑硯材岩盤と波板石スレート

硯上山・明神山・名振山から産出される多くは、石色の黒が強いことで黒石と呼ばれる一般的な雄勝石で、主に波板地区で採石されるものは、黒石の他、ネズミ石、白石と呼ばれる硯材が産出される。多くの職人は、硬く硯材に向かないということで波板石を避け、剥離しやすく柔らかい斑紋の入らない一般受けする黒石を主な硯材としていた。しかし、親子二代に亘り、この波板石に拘って作硯を続ける硯匠もいる。なお、白石やネズミ石の鉱脈は、他の採石地にもあるという。

雄勝石は、純黒色で光沢感がある。粒子の均一性に優れる。圧縮や曲げに強い。吸水率が低い。耐寒・耐熱性に富む。化学的作用や経年劣化の少ないという特長であることから、硯石だけではなく、北海道旧庁舎や、大正 3 年に創建された東京駅舎の屋根にそのスレートが使用され、平成 24 年の復原時にも、丸の内駅舎の屋根に使用されるなど、建築や装飾品等としても重宝される石である。また、波板石は、黒くならないことから、主に家屋の塗り壁の原料や、石が大きいことでビリヤード台にも使用されたと、当時の資料に記されている。他に、工業用スレート材として採石される、宮城県牡鹿郡女川町の女川石や、登米市登米町の登米玄昌石と、岩手県陸前高田市矢作町の雪沢スレートがある。因みに矢作町では紫雲石硯の硯材も産出する。

あの 2011 年 3 月 11 日の東日本大津波震災で、海に面した雄勝町は壊滅的被害を蒙り、全てが流失してしまったが、再興を図り、雄勝と人々の暮らしの関わり・地域産業としての成長、日本一の硯の町の復興のシンボルとして 2021 年 4 月 11 日『道の駅・硯上の里おがつ』をオープン。そのメイン施設が雄勝硯伝統産業会館である。

『道の駅・硯上の郷おがつ』と『伝統産業会館』

館内展示の日本一の硯と来場者用リーフレット

また、波板地区の防潮堤改修に際しては、クラウドファンディングも利用して資金を調達し、無機質なコンクリート壁面に波板石スレートを張り付け、メモリアルウォールとしたことは特筆すべきである。

波板地区防潮堤『メモリアルウォール』

更には、今は見る影もなくなり残念であるが、限界集落の魅力や可能性の研究・再発掘のため、交流人口を増やしながらコミュニティの維持と地域活性化を図るプロジェクトで、製硯ワークショップ・展示即売所・宿泊所を兼ねた交流の場である『波板地域交流センター（ナミイタ・ラボ）』も、兵庫県からの義援金を原資に建設し、グッドデザイン賞に輝いた。

『ナミイタ・ラボ』と裏庭に重ねられた屋根瓦スレート

雄勝町に限らず、和硯の各産地では、様々な問題に直面している。採石の労（硯材不足・体力・時間・経費）を避けるためと、経済的に立ち行かないことからの後継者不足が最も大きな理由である。それが、硯材の産地偽装や代替品にも繋がっている。例えば、山口の赤間硯は岩手県の紫雲石を、宮崎硯の紅渓石硯は韓国産の硯材を、山梨県の雨畑(端)硯は宮城の雄勝石を流用し化けている。そして無尽蔵を誇る雄勝石を硯材とするこの雄勝硯でさえもが、中国の羅紋石やアメリカのバーモンド石を硯材としていることも多い。これらのことは決して悪意ではなく（と信じたい）、地場産業維持のために仕方なく行わざるを得ない緊急避難措置、いわば苦肉の策と捉えたい。

赤間硯や雨畑硯、そして紅渓石硯は、硯材の質・量共に採石困難で、鉱物学的に同じ硯材の産出地に救いを求めたというのが真相のようである。雄勝硯は、昭和 40 年頃、中国湖南省で学童向け硯の技術指導をし、そこからの半製品を輸入し、雄勝で仕上げを施し需要に応えていたということがあった。現在では、半製品ばかりではなく、敢えて羅紋石やバーモント石を輸入し、雄勝で製硯やテーブルウエアにすることも多くなり、明神山や波板の硯材とを上手く使い分けながら、地域の伝統産業の生き残りに懸けているようである。

雄勝硯に限らず、墨硯産業衰退の根底にあるのは、磨墨するという書道にとっての最も大切な作法や儀式が、墨液の登場と書家自身の活動や指導によって蔑ろにされ、硯の需要がなくなったことでもある。硯の需要がなくなれば、当然、墨（固形墨）は不要となり、特に奈良の墨匠の死活問題と、それがそのまま、地域の伝統産業の衰退にも繋がっている。墨硯の伝統産業があってこそ成立する書道も伝統産業である。その生業を支えあう相互の産業を、直接救うことは難しくとも、改めて書道の作法や儀式を意識することで、墨硯の重要性の啓発になると同時に、墨硯という伝統産業を保護することに繋がり、ひいては書道を見直すことになってもらいたいものである。

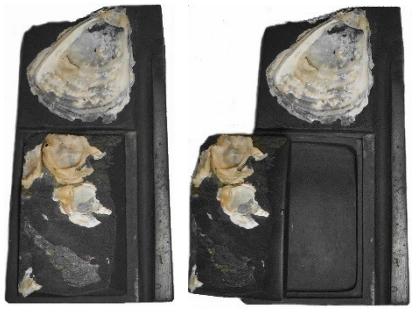
この特別展示に当たり、宮城県石巻市雄勝総合支所地域振興課産業建設係様・雄勝硯生産販売協同組合様には、書展ご来場者配付用として、雄勝硯リーフレットのご手配ご贈呈を賜り、また、取材に対応賜りました雄勝町の皆様に、御礼申し上げます。

宮城県石巻市雄勝町波板坑

雙池共蓋波板硯
（そうちきょうがいなみいたけん）

■蔵No.：SB19600000-00500
■硯銘：無銘
■時代：～1960 年代
■寸法：6 ｲﾝﾁ（15cm×9cm×3cm×780g）
■特徴：冊子紋・金暈・共蓋内面池

1960 年代に父海雲が入手。硯に向かない硬い硯材という謂れであるから、波板石の白石であろう。現在の雄勝黒石のような柔らかさや粘り感はない。かなり硬質で金属的である。薄い硯ではあるが、石密度が高く、比重もその分だけあるのか重い。中国・歙州硯のような冊子紋や金暈も表出している。鋒鋩は細微というより、目が能く立っていて磨墨感が味わえる。特筆すべきは、父が自ら刀を執り、共蓋内面に池を掘ったところであろうか。その共蓋内面には、硯砥石か耐水ペーパーなどの鑢で整えたような形跡もあることから、もしかすると、墨堂（硯面）としても自ら仕上げたのかも知れない。硯側には、朱墨で自らの名を揮毫している。少なくとも、物心ついた頃には既に机上にあったことから、筆者が初めて眼にした硯が、これと波板牡蠣殻硯かも知れない。



宮城県石巻市雄勝町波板坑

波板牡蠣殻硯
（なみいたかきがらけん）

■蔵No.：SB19600000-00550
■硯銘：無銘
■時代：～1960 年代
■寸法：6.4 ｲﾝﾁ（16cm×9cm×3cm×450g）
■特徴：牡蠣殻・細微

前述の硯と共に父海雲が入手し、母が使用していたもの。加工するには硬い材で、本来硯にする石ではないが珍しいので硯にしたとの謂れと聞いた。波板石は黒石であっても硬いということであろう。雄勝湾名産の牡蠣が、まるで化石状に付着した硯材を上手く利したものである。他にも海の幸が大きな硯材を覆っていたのであろうか、牡蠣殻をのみを残すためアチコチ抉ったり削ったりし、更に幾面かにしようとして、最終的にこのような型の硯になったと推察できる。石自体は素晴らしいが、金属的な硬質感もあり加工が難しかったのか、彫にやや拙さがあり、硯面の仕上げもイマイチではある。しかし、機械に頼らず手彫りした歪みも素朴で味わい深い。因みに、牡蠣の起源は約２億９千万年前のペルム紀で、雄勝石が生成された時代でもある。とすれば、この牡蠣殻もその時代のものかも知れず、歴史的ロマンを感ずる。なお、牡蠣の養殖は、雄勝湾の隣、宮城県松島湾が発祥の地である。

宮城県石巻市雄勝町産

野趣深沁硯
（やしゅしんしんけん）

■蔵No.：SB19610000-00500
■硯銘：無銘
■時代：～1960 年代
■寸法：8 ｲﾝﾁ（20 cm×15 cm×3 cm×1.6 kg）
■特徴：冊子紋・金暈・黄膘

どのような入手経緯か全く記憶にない。いや、自分のものか、家人のものかさえも不明である。小学生の頃、墨州院本部 2F 教場（実家）の洗筆場で見たような記憶もある。もしかしたら稽古人の忘れ物かも知れない。書道関係用品以外の被災回収品の段ボール箱から出て来たものかも知れず、とすれば、敷地と思われた場所から取り敢えず何でもかんでも回収していたことから、我が家のものと限らない場合もある。他人のものを間違って回収し、拾得物として届出もしないまま 13 年。もう既に時効である。既に自分のであると断じても、法律が許してくれよう。5 年ほど前には、再建した家の前の水路から８ｲﾝﾁの羅紋硯２面を浚ったこともあった。近所には、このような硯を使用するような住人はおらず、自分のものと信じ蔵してある。これも時効である。無事に回収できたと安心すべきか、得したと喜ぶべきか。かなり年季が入り、多少の草臥れ感もあるが、堂々たる風格を醸している。弄繰り回さず、硯材の造形を大切にした確りとした作硯で、腕利きの硯工の職人技を感ずる。どことなく惹かれるのは、天然型・自然型といった素朴感が味わい深いからであろう。黒石ながら歙州硯のような冊子紋や金暈と思しきもの、黄膘も表出していることからも、未だ良質の硯材が採石されていた頃の旧いものであるのは間違いないであろう。とすれば、見たことがあるという記憶は正しく、55 年以上前の旧い硯といえる。

城県石巻市雄勝町硯上山坑

御留山猿面硯
（おとどめやまえんめんけん）

■蔵No.：SD19900917-00180
■硯銘：大健　作
■時代：～1990 年
■寸法：6.5 ｲﾝﾁ（16.5cm×10.3cm×2 cm×483g）
■特徴：細微・滑玄

東日本大津波震災の被災回収品である。左上硯縁の欠けが惜しいものの、幾つも流失したことを考えれば、この程度で済んで良しとすべきか。目ぼしいものを回収する以外に他にすることもなかったため、回収した硯の汚泥を数日掛けて洗い流し、暫く親族宅に預けていた。紹介している他の硯の半分は、このような経緯で、6 年後、漸く引き取ることが出来た。正確な数を記録していたわけではないが、少なくとも段ボール箱１つ分が足りないと感じていた。先頃、預け先が建物を解体するに当たって、麻子坑端渓硯とこの硯の２面が出て来たらしい。もっと出て来るはずと思っていたが…。何はともあれ、13 年振りの再会を果たし、今回の展示に間に合った。1990 年９月 16 日、～紫雲石の郷～岩手県一関市東山町で、硯ではなく紙漉を見学。翌日、宮城県石巻市雄勝町の製硯を見学。その折に求めたものである。研究を始めて５～６年、墨硯を求めて、いや、漁っていた頃である。これぞ雄勝硯という黒石で、製硯も確りとなされた、いい表情をした素晴らしい猿面硯である。硯面は頗る細微にして滑り感がある。硯房では、職人が作硯に汗を流していたが、そのすぐ側には、粗彫・未仕上の四五平（13.5 ㎝×7.5 ㎝）の学童用の中国・羅紋硯が積み重ねられていてギョッとした。バブル期で需要に追い付かず、また、低価格設定のため、雄勝石と同種の羅紋石を使用していたようである。産地偽装と思い込んだが、後で調べたところ、これには雄勝硯とは銘打たずに、本石硯・天然石硯との表示で、メーカーの書道セット用に組み込まれるものだと知った。現在では、硯材が羅紋石でも製硯が雄勝であれば雄勝硯と表示しているようである。それには伝統的工芸品のマークは外してあるはずと信じたいが。年に数度、石巻市雄勝硯伝統産業会館に足を運ぶが、今はもうこれだけの硯をなかなか見かけない。まずまずと感ずるものは驚くほど高価である。坑洞に拘らなければ、そこそこの端渓硯が入手できよう。

宮城県石巻市雄勝町硯上山坑

円渠迫山硯
（えんきょはくざんけん）

■蔵No.：SK19900917-00300
■硯銘：康山　作
■時代：～1990 年
■寸法：6 ｲﾝﾁ（直径 15 糎×2.3cm×780g）
■特徴：細微・深滑黒

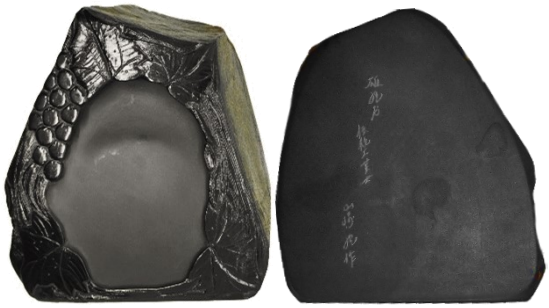
先述の製硯見学時の記念ということもあり、玉石混交の中から、４面に眼をつけ、父海雲が１面、筆者が先の猿面硯と後述の円窓硯の２面を購入。まだ物欲しそうに見えたのか、残り１面のこれを、父海雲が土産として頂いてしまった。同行の門下生皆も購入したため、その引率料代わりにだろうか。硯上山の硯材とのこと。黒石である。先の猿面硯と似たようなまずまず高価な値札が付いていた。素晴らしく細微な石肌である。温もりを感じ、吸い付くような手触りでもあり、黒味がどこまでも深い。雄勝硯としては第一級品である。まるでお堀状の海から山が迫り上がるように墨堂を曲線で盛り上げた製硯に高い技術を見せる。本漆塗蓋は、父海雲が、かな手本揮毫時の夥しい反故紙（最高級純雁皮紙）を重ね合わせ、何層にも漆を塗り、数年掛かりで作ったものである。ところで、父海雲の買い求めた方の硯は、本来この硯に付いていた共蓋と共に、杳として行方知れずである。震災で流される前から見掛けなかったが、自分が求める硯や、同行の門下生の分を選別するのに集中していたため、どんな硯だったかも記憶にない。帰宅後見たような気がしないでもないが。父海雲が求めるほどであるから、おそらくは素晴らしいものだったはずである。

宮城県石巻市雄勝町硯上山坑

輪池円窓硯（りんちえんそうけん）

■蔵No.：SK19900917-00070
■硯銘：康山　作
■時代：～1990 年
■寸法：5 ｽﾝ（直径 12.5cm×2.6cm×660g）
■特徴：鋒鋩細微

入手経緯は先と同様の製硯見学時。先述の猿面と円渠と更にこの円窓、何かしらの縁があったのか。硯上山産ということであった。円い池に浮かぶ平らな墨堂。その墨堂と共蓋に縁回しが為された手の込んだ演出である。池と墨堂は細微で素晴らしいが、他の硯側や硯裏（硯陰・硯背）、共蓋は粗い。硬質感や冷感があり、硯音は金属のように響く。顕微鏡で視ると、粒子が粗くやや灰色味を帯びている。これも硯上山産の硯材と聞かされたが、中国・羅紋石のようにも感ずるのだが。東日本大津波震災回収品のため、硯裏の縁に剥欠がある。



宮城県石巻市雄勝町産

御留山銀杏硯（おとどめやまいちょうけん）

■蔵No.：KY19980000-03000
■硯銘：雄勝石　伝統工芸士　山崎勝　作
■時代：1998～2000 年
■寸法：9 ｽﾝ（22.5cm×21cm×5cm×4.6kg）
■特徴：細微・滑玄

伝統工芸士・山崎勝（磨佐留）の作硯。今から 10 年ほど前に本院会員から贈られたものである。その会員も知人から頂いて 10 年以上経つとのことであった。つまり、少なくとも 20 年以上前のものである。雄勝硯が国から伝統的工芸品の指定を受けたのが 1985 年。山崎勝が伝統工芸士として認定されたのが 1998 年。この硯に「雄勝石 伝統工芸士 山崎勝」と刻銘されていることから、山崎勝が伝統工芸士になって間もなくの作硯ということである。現在 80 歳を超えているとのことであるから、60 歳前後の脂の乗り切った頃のものとしても良いであろう。揺るぎない刻線美と整えられた造形美がそれを物語る。採石地は不明ながらも、素性の佳い黒石である。唐硯のような紋の表出は皆無であるが、実用に適した細微な硯面で、ドッシリとした厚みがある。また、硯材が産出する山の秋を彩る銀杏をイメージ（せっぴ）し、念入りに磨き込まれた滑玄な硯縁、硯側に石皮を残した装飾、力強い彫や揺るぎのない造形が、厚味と相俟って、堂々たる風格があり、それなりの机上にこそ相応しいであろう。いや、硯の用途としてではなく、飾り石として床の間に鎮座すべきものであろう。

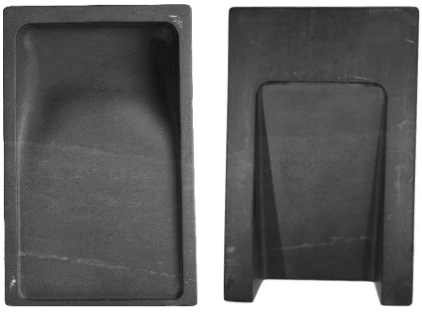
宮城県石巻市雄勝町明神山坑

飾卓一葉硯（しょくたくいちようけん）

■蔵No.：KD20060000-00070
■硯銘：無銘
■時代：～2006 年
■寸法：5 ｽﾝ（12.5cm×7.5cm×1 cm×131g）
■特徴：細微・滑玄

2006 年から 2010 年頃の入手だったか。東日本大津波震災で収蔵目録を失ったが、思い入れの深いものや、わざわざ求めに出かけたもの、求めるに当たって印象深い遣り取りのあった場合には、朧気、いや、微かにでも未だ記憶の断片が残っている。墨州院東京・銀座展開催時に、いつも自分への記念品や土産として小硯を求めていた。これもその内の一つである。硯としての用途ではなく、テーブルウエアー、豆菓子用の小皿として求めた。豆菓子を一粒落とせば、金属音が響く。硯は水を弾く性質であることから、乾き物の小皿としていい仕事をしてくれる。印合や端渓硯、蒔絵や象嵌細工の様々な用品等と共にガラスケースに飾られていた内の 1 面。請われれば販売するが、本来は、商品ではなかったのであろう。品名はなく、価格も表示されていないものであった。見て触れた直感では、高品質の変わり種の羅紋硯のようにも覚えた。が、その高級品を扱う専門店の店主曰く「一番大きく有名な硯房からの仕入れで、石（硯材）が多く採れる山の由緒正しき確かな雄勝硯。」ということは、明神山坑の黒石で、澤村製硯であろうか。滑玄（瑞々しい純黒色）で、陶磁器にはない存在感を醸す。もちろん硯としての役割もきちんと果たす細微な※鋒鋩で、葉の括れなども表現されたデザインが秀逸でもある。

※鋒鋩とは硯の表面にある石英や長石の極微細な突起で、これが鑢の役目となり磨墨出来る。

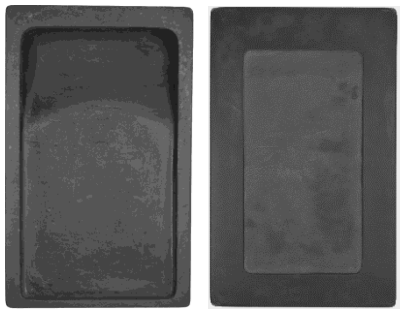


宮城県石巻市雄勝町波板坑

挿手波板硯（そうしゅなみいたけん）

■蔵No.：KS20190402-03000
■硯銘：無銘
■時代：～1970 年代
■寸法：12 ｽﾝ（30cm×19.5 cm×9.5cm×11kg）
■特徴：冊子紋・白斑・漣紋・鋒鋩細微

入手してから 10 年以上は経つであろうか。東日本大津波震災で流失した分を補おうと、目ぼしいものを入手していた頃のものだったか。懇意の業者氏が、書家で硯コレクター遺族の放出品として和唐入り混じった数面を持ち込み、品評と価格が適正かどうかの確認と、眼鏡に適ったものがあれば鑑定料分を割引にてと言われ、この太子風挿手硯と長方波板硯、更には小野図南による紫雲石大硯を置いてもらった。前の持ち主が 50 年以上前に現地で求めた波板硯とのことであった。硯材は白石であろうか。上質の中国・羅紋硯や歙州硯を思わせる。この時代は、波板石の白石やネズミ石は殆ど硯材として使用されず、正式な販路に乗ることも殆どなかったので珍しい。表裏に刷子紋が入り、中国・歙州硯のような羅紋が表出している。太子硯風に深く抉られた硯裏（硯陰・硯背）であるが、形状は所謂、挿手硯である。この頃は、独り立ちした雄勝硯匠は不在で工房お抱えがほとんどであり、また銘を入れる慣習も少なかったため、刻銘はないが、素晴らしい技術の硯工の作である。硯式も研究されていたのであろう。現在の雄勝硯と是非とも比べて欲しい。まったくの別物である。1980 年代以降は、ほとんどこのような大型硯の需要は無くなり製硯もされなくなった。作家としての硯匠が、依頼を受けるか鑑賞用としてのみ作硯する程度かも知れない。そういう意味でも、これは貴重な資料となりうるであろう。右脚が破損し修繕の跡があるのは惜しまれる。



宮城県石巻市雄勝町波板坑

長方波板硯（ちょうほうなみいたけん）

■蔵No.：KS20190402-01000
■硯銘：無銘
■時代：～1970 年代
■寸法：9.6 ｽﾝ（24 cm×15cm×4cm×3.4 kg）
■特徴：冊子紋・白斑・鋒鋩細微

入手経緯は、先の太子風挿手硯と同様である。この硯材も、これもおそらく白石で、白斑紋のグラデーションが美しく、やはり中国・歙州硯のような波紋も表出している。余計な飾りのないオーソドックスな大型の長方硯、シンプルではあるが、落ち着きのある凛とした重厚感で、正に硯としての存在感に溢れる。これも現在の雄勝硯と比べて欲しい。石の種類が違うのではないかと思われるほどである。現在の雄勝石は、硯としてだけでなく、いや、硯以上にテーブルウエアを始めとした実用品や装飾品として、地場産業を支えている。本来の要は硯であったはずだが、硯が日常生活に溶け込んでいるものではなくなって久しく、特別な物・高級な物であり、特殊な人々が手にするというイメージとなっているような気がする。そういう意味からすると、現代社会、いや、場合によっては書家においても、これが無用の長物であるかも知れないが、だからこそ、大きく重厚感のあるこの硯が、殊更に特別な逸品としての存在感を示すであろう。

宮城県石巻市雄勝町産

半渠円窓硯（はんきょえんそうけん）

■蔵No.：BD19910228-00350
■硯銘：無銘
■時代：～1980 年代後期
■寸法：4.7㌢（直径 11.8cm×2cm×522g）
■特徴：鋒鋩細微・滑玄

6～8 年前、今は廃業した業者氏から入手。バブル期（1986 年 12 月～1991 年 2 月）の仕入品という謂れであった。廃業準備の倉庫整理で格安にて放出すると。当時の定価表示を見て驚きを隠せなかったが、在庫一掃お買い得価格で入手。波板以外の黒石。かなり磨き仕上げしたのか、強い光沢感がある。かなり細微で滑りを感ずる硯面。厚味もあり、ドッシリとした重厚感である。銘はないが、経験豊富な腕利きの正確な職人技が光る作硯である。斑紋はほぼ皆無であるが、当たり石である。実用的雄勝硯のポテンシャルが如何なく発揮されるものであろう。また、付加価値を高めようとしたのか、和硯では珍しく花梨材の相箱入りで、そのまま、上質の羅紋円窓硯と称しても通用する。バブル期は、供給が追い付かないほど需要があった時代で、雄勝でも羅紋石を硯材としていた頃で、実際は、これも雄勝硯ではなく羅紋硯かも知れぬが（硯材：羅紋石・製硯：雄勝）、上質の雄勝石は、羅紋石より石密度が高く硬質で黒色が深く滑り感があり、高度な製硯技術から鑑みても、ここは業者氏の謂れを信じたい。余談になるが、バブル期は和硯・唐硯共に最も高値の頃のものにもかかわらず、筆者も取引数業者から毎月のように買い漁っていた。文字通り玉石混交で、高い授業料も払ったお陰で様々な墨硯に触れられることが出来て、今がある。

宮城県石巻市雄勝町波板坑

金華散波板硯（きんかさんなみいたけん）

■蔵No.：GD20210905-00450
■硯銘：紫峰
■時代：1984～1994 頃
■寸法：5㌢（11.6cm×9.8cm×2.6cm×479g）
■特徴：金星・金沙紋・冊子紋・黄膘

全国の硯材、中国・端渓石で作硯する小野寺紫峰によるもの。雄勝硯は 20 面ほど蔵しているが、中国・歙州硯のような紋が如実に表出する波板硯をずっと探していた。3 年ほど前、幾度か硯を求めたことのある信頼すべき高級品を扱う新古美術商から入手。この大きさの和硯としてはかなり高価で、端渓硯より値が張ったものの、価値観的には妥当であろう。波板の旧き良き時代の黒石であろうか。一見、歙州硯と見紛うような、金星・金沙紋・刷子紋・黄膘である。とにかく美しい。小振りながらも、堂々たる風格があり存在感抜群である。刻線表現によるものか、引き締まった印象の割にどこか柔らかく、硯側は、断崖絶壁を思わせる厳しさも感じ、得も言われぬ造形美である。石質も細微である。約 40 年に亘り硯を鑑て来たが、これほどの雄勝硯は滅多にないであろう。和硯中でも屈指のものである。小野寺紫峰の硯は、岩手県の紫雲石硯（緑石）と中国の端渓硯（老坑）も蔵しているが、共通する刻線美・造形美は、曲の中の直である。

宮城県石巻市雄勝町産

雄勝鳳来円相硯（おがつほうらいえんそうけん）

■蔵No.：YA20240000-00250
■硯銘：無銘
■時代：1995 年頃
■寸法：5.6㌢（直径 14cm×2.5cm×853g）
■特徴：水波紋・冊子紋

厳密に評すれば､伝統的工芸品としての雄勝硯ではない。伝統的工芸品筆で有名な愛知県豊橋産である。鳳来寺硯（鳳来硯）で著名な日本一の硯匠と謳われた名倉鳳山､その 4 代目の指導による作硯である。硯材は吟味された 30 年以上前の旧い雄勝石であるという。雄勝硯も鳳来寺硯も硯材は黒色硬質粘板岩であるが、産地と製硯地が異なる。これを､どう評するかである。特に端渓硯においては､産地（坑洞）や年代の偽装が顕著である。和硯においても､他山の石とならぬよう、あくまで硯材産出地と製硯地名を明確にし､騙りと捉えられぬよう、この硯の様な説明が必要であろう。この硯は吟味された旧い硯材によるものということであるが、確かに素晴らしい。現在の多くの雄勝黒石にはほとんど表出しない石紋が､まるで細羅紋硯のように表出し、墨堂から海に注ぐ川のように、刷子紋が走っている。現在の硯材では、なかなかこれだけのものは採石されないであろう。惜しむらくは、雄勝硯最高峰硯材の波板石での作硯が為されれば､金鳳石を硯材とした最高品質の鳳来寺硯と見紛うものが出来たかも知れない。

宮城県石巻市雄勝町波板坑

椿壽波板硯（ちんじゅなみいたけん）

■蔵No.：YA20241215-00080
■硯銘：弘行
■時代：2011 年 6 月以降
■寸法：6㌢（15cm×10cm×1.5cm×364g）
■特徴：冊子紋・黄膘・白斑紋

年に幾度か雄勝を訪ねている。ある日「ナミイタ・ラボ」を訪ねて硯を見て、話を伺った折には、そこの硯工と思しき管理人が煙草を燻らせながら「遠藤さんどござ行ぐど、こごより立派な波板硯あるがら。そごのは本当の雄勝硯だがら」と教えてくれた『～遠藤盛行・弘行 親子の念い～雄勝硯』で思いを馳せ、幾度も硯房の近くを通り気にしていたが、ゆっくりと話を伺って硯を見る時間もなく、立ち寄る機会に今もって恵まれていない。2 代に亘り、雄勝硯最高の硯材、波板石に拘っている遠藤盛行・弘行の親子。１面ずつ持ちたいと思っていたが、偶々、良い出物に巡り合った。この硯は、東日本大津波震災後、再起し刀を揮い始めた 2011 年 6 月以降の作か、それ以前の作かは不明である。椿をあしらった作硯は多いようである。雄勝椿の花弁に黄膘を上手く残した心憎い演出である。矛盾する表現かも知れぬが、墨堂は確かに円の造形である。しかし、刻線は決して丸や曲と感じることはなく、直である。これが研ぎ澄まされた刻線というものである。カチッとした揺るぎのない造形で、細部まで気を抜かない仕上げには真摯さ、いや、硯への愛着を感ずる。硯工や硯職人という域を超えた、硯匠という作家的な美学や誇り、矜持が息づいているのであろう。遠藤弘行の硯は、決して大きく見えず、むしろ実寸よりコンパクト感がある。おそらくこれは、凝縮感というものであり、それが張りつめた緊張感を与える。そう覚えるのは、果たして筆者だけであろうか。

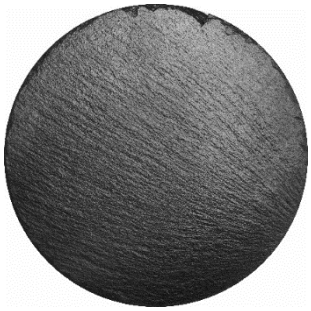
宮城県石巻市雄勝町波板坑

老松抱月波板硯（ろうしょうほうげつなみいたけん）

■蔵No.：YA20241218-00110
■硯銘：宮城県雄勝産玄昌石　盛行
■時代：2011 年 6 月以降
■寸法：6㌢（16.5cm×13.5cm×3cm×1.49 kg）
■特徴：冊子紋・黄膘・白斑紋

先述の遠藤弘行の厳父、遠藤盛行の作硯。入手経緯は同様。他にもあったが、先述の椿の花弁の黄膘（石皮）に対して、月光の黄膘ということで、これを選んだ。やはり似通った雰囲気の造形美や、黄膘の活かし方であるが、父の刻線は厳しい中にも少し穏やかな優しさや柔らかさを感ずる。これが円熟味であろうか。かたや弘行の刻線は、既に父を超えて研ぎ澄まされ、常に厳しい修行僧のような作硯姿勢と感ずる。あの東日本大津波震災の影響がないとはいえないであろう。波板の白石であろう。端渓硯であれば石眼を活かすが、その代役は黄膘である。この黄膘の濃淡紋が、まるで月のクレーターをイメージさせ、その月光が松の木の間隙を縫い、池を照らすかのようである。墨堂と硯池、硯縁のバランスの妙で、寸法の割には大きくドッシリと感ずる。これが風格であろうか。

雄勝波板石（波板坑）
採石・製作：波板自治会



ミナスジェライス石（ブラジル）
輸入・製作：某建築資材関連企業

バーモント石（アメリカ）
輸入・製作：波板自治会

雄勝町では、硯以外に活路を見出すことで、雄勝石そのものの存在を守ることに専念しているようである。雄勝石≠硯は、時代の趨勢、いや、書道界に在る我々が、その責任を痛感せねばなるまい。雄勝石は、サーモグラフによる保温性のエビデンスもあることから、料理を供するプレートとして、単純ながらも高級感に溢れて美しく、飲食店からの引きも多いと聞く。筆者も 10 年以上前から、硯ばかりではなく、音響製品や日用品としても活用している。

宝石の鉱山として名高い、ブラジル・ミナスジェライス州産の粘板岩は、色調に富み強度も高いことから、主に建築用資材として欧米で広く流通し、日本でも流通するようになった。バーモンド石は、アメリカ・バーモンド州産で、粘板岩だけでなく、各種宝石、御影石、大理石等の様々な石材の産地として世界的に有名である。写真の様に、これらは様々な色調や斑紋も表出することから、今までにない硯材になりうると、数年前から眼を付けていたのであるが、やはり、そこには墨硯の需要の問題が立ちはだかる。

玄晶石：雨畑硯原石
（山梨県南巨摩郡早川町雨畑産）

雨畑硯の硯材、玄晶石である。雄勝石（玄昌石）との比較史料として参考展示し、ここにも掲載する。

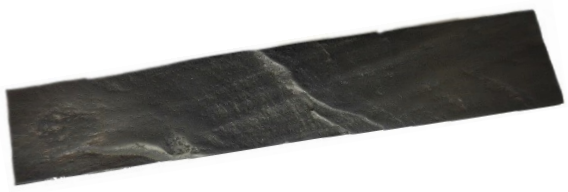
鉱物学的には同質の黒色硬質粘板岩で、雄勝の玄昌石と見た眼の違いが判らない。強いて言えば、いや、無理に違うと思い込み視ると、黒色の強みや光沢感が異なる。顕微鏡では、石英や長石と思われる粒子が細やかである。おそらく、雨畑石は水石に近いからであろうか。

雄勝石の多様性と活路

玄昌石：雄勝硯原石
（宮城県石巻市産）

宮城県石巻市雄勝町で採石される北上山系登米層の古生界ペルム紀の 3～2 億年前の地層から産出される黒色硬質粘板岩である。これを黒くて美しいことから玄昌石と称し、雄勝産のものを雄勝石と呼ぶ。埋蔵量は無尽蔵といわれ、露天掘りで採石される。地域全体が産出地であり、公式的発表によると、主には 8 カ所、東日本大津波震災以後は 4 カ所のみで採石される。

雄勝石文鎮
（宮城県石巻市雄勝町明神山坑）



30～20 年前の賜り物であった。回収した記憶は定かでないが、東日本大津波震災でも無事であったということか。花瓶もあったが、こちらは流失してしまった。

硯にならない大きさの硯材を有効利用している。実用としてはもちろん、高級感にも溢れることから、書斎の飾り物としても良いであろう。この大きさではかなりの重量で、粒子密度の濃い証であろう。

築約 100 年旧家スレート屋根瓦
（登米玄昌石：宮城県登米市登米町産）

岩手県大船渡市猪川町の旧家のスレート屋根瓦である。当時この地では、スレート屋根瓦葺きの草分的存在だった。解体に当たり頂いた。築 100 年近くの経年であるが、未だ未だ耐久性はあると思われる。大きな雹が当たり割れない限り、半永久的であろう。改めて玄昌石の特長を垣間見たような気がする。

専門家によると、これ 1 枚の業者卸価格が 5,000～4,000 円するとのことである。和風の大きなお屋敷で、このスレート瓦の量も相当な枚数であったはず。時代からすれば、雄勝石ではなく、工業用スレートの一大産地として名を馳せた、宮城県登米市登米町の登米玄昌石と思われる。

書道用品総合卸小売

筆・墨・硯・書額・画仙紙・仮名料紙・掛軸・額装表具

あかや筆墨本舗

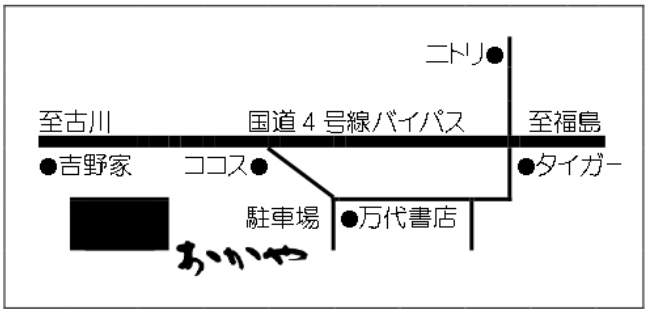
〒981-3111　仙台市泉区松森字斉兵衛 58-4

ＴＥＬ（０２２）３４６−８１１８

ＦＡＸ（０２２）３４６−８０７７

営業時間／9:00～17:00　※土曜日は 12:00 まで

定休日／日曜・祝日・第１土曜日



書道用品と表装・額装

キヨーホー

新宿本店 <年中無休>　〒169-0073 東京都新宿区百人町 2-21-23

TEL 03-3367-4451 FAX 03-3367-4453

名古屋店 <定休日 毎週水曜日> TEL 052-263-9401 名古屋市中区栄 4-2-10 KURI ビル 2F

仙台店 <定休日 毎週水曜日> TEL 022-262-3861 仙台市青葉区中央 2-10-20 シエロ広瀬通ビル 2F

横浜店 <定休日 毎週水曜日> TEL 045-641-8320 横浜市中区常盤町 2-17 常盤町新井ビル 4F

宇都宮店 <定休日 毎週水曜日> TEL 028-610-1139 栃木県宇都宮市東宿郷 3-6-1

市川店 <年中無休> TEL 047-314-0044 千葉県市川市南八幡 5-10-7

ネット販売 www.kywa.jp

《店舗営業時間》AM10:00 ～ PM6:00 <仙台店のみ日曜・祝日 PM4:00 迄>

-文房四宝輸入の専門商社-
協和貿易株式会社

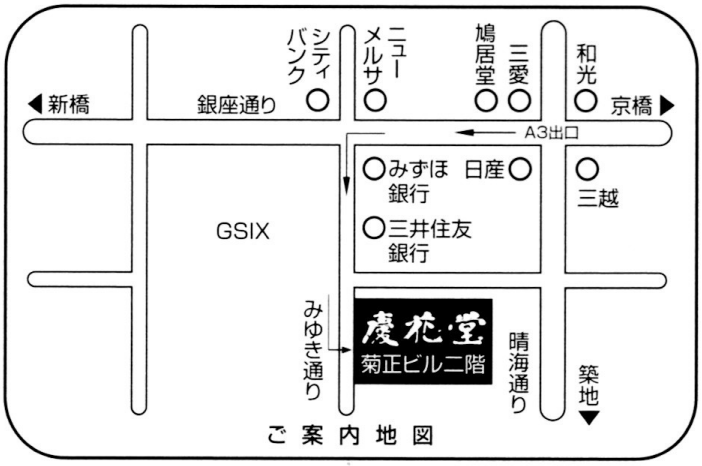
〒272-0023 千葉県市川市南八幡５−１０−７ 協和ビル２Ｆ
TEL 047-314-6002　FAX 047-314-6004

優良 書道用品専門店

銀座店 慶花堂

誠実 求めて安心
責任ある販売 使って安心

銀座店のみ日曜・祭日営業　午前10時～午後6時



フリーダイヤル
0120-88-2017

〒104-0061
東京都中央区銀座5-9-13
菊正ビル2F
TEL・FAX 03(3573)5011

地下鉄・銀座線 出口A3(徒歩2分です。)(丸ノ内線、日比谷線も近いです。ご利用下さい。)銀座にお出掛けの折りにはぜひ共お立寄り下さい。

本　店　TEL (03)**3647-4346～8**　FAX (03)**3647-4384**

伝統的工芸品熊野筆製造

株式会社 一休園

【本　社】〒731-4221
広島県安芸郡熊野町出来庭2-2-44
TEL：082-854-0019

【大　阪】〒580-0014
大阪府松原市岡6-5-50
TEL：0723-35-0605

【東　京】〒224-0003
横浜市都筑区中川中央1-21-1-203
TEL：045-507-6319

【広島筆センター】〒730-0051
広島市中区大手町1-5-11
TEL：082-543-2844

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ：http://www.ikkyuen.com/

E-mail：fude@ikkyuen.com

墨運堂　検索

特　選　書法一品

なめらかな運筆、
美しい紫紺系の墨色。

天然にかわ製

特選 書法一品
墨液・濃墨液

200ml／500ml／2L

創業文化二年（1805年）

株式会社 墨運堂

奈良本社・工場／東京店／福岡（営）

(本　社)　〒630-8043奈良市六条1-5-35
TEL：0742-52-0310　FAX：0742-45-6880

(東京店)　〒270-0013松戸市小金きよしヶ丘4-10-2
TEL：047-347-5100　FAX：047-347-1641

上品で力強くつややかな墨色黒味にこだわった書道液

作品用書道液

玄徳

それぞれの濃度に適した伸び、
運筆の良さで書き易く、製品の
安定性、乾き、表具性に優れた
樹脂系作品用液体墨です。

選べる
4種の濃度

普通濃度　中濃墨
濃　墨　超濃墨

株式会社 呉竹　〒630-8670 奈良市南京終町7-576
TEL:0742.50.2050 FAX:0742.50.2070

呉竹公式 HP▶

藤和額装株式会社

TOWA

本社・工場
〒234-0054 横浜市港南区港南台7-51-12
TEL.045-833-5273(代)
FAX.045-833-5275

■書道展用貸額
■屏風
■書画御表装
■原拓裏打ち
■古書画修復

岩手県公安委員会許可
第 211100000782 号

美術品商 墨硯齋

(主人:菊地明彦)

〒022-0002 岩手県大船渡市大船渡町新田 44-15／0192-27-3406

YAHOO! JAPAN オークション

墨硯齋サイト QR

ホームページ

墨州院

墨州院の公式ホームページ。最新情報や稽古日程、メディア掲載情報もチェックできます。

YAHOO! JAPAN オークション

美術品商 墨硯齋

美術品商墨硯齋のオークションサイト。オークションへの参加はもちろん、文房四宝の見識も深めることができます。

YouTube

墨

墨州院公式YouTubeチャンネルで展覧会の様子等を公開しております。

YouTube

書のつばさ

~Calligraphy~

毎日書道会公式YouTubeチャンネルに墨州院第 35 回東京展が特集されております。